

論説

再考、国際共生



幡新 大実

1. 国際共生とは何か？

大阪女学院大学国際共生研究所の『国際共生とは何か』？この点については、すでに本研究所 Newsletter 第7号に黒澤満教授の論説があり、種々の論考をまとめた本研究所叢書3が2014年に東信堂から刊行されている。今回、Newsletter 編集委員の交代を機会として、第7号論説等において問題提起がなされながら特に探求はなされなかった国際共生の研究の第二の目的を中心に、僭越ながら新編集委員を代表して筆者なりの論考を加えてみたい。なお「国際共生」の定まった定義は存在しないことにあまり変化はないと思われ、また、定まった定義が望ましいかどうか、ここでは論考の対象とはしない。

さて、黒澤教授は国際共生研究の目的の第一を「国際関係論あるいは国際政治において、国際共生という概念はどういう内容および特徴を持つ概念であるのかを明らかにし、この新たな概念を使用することにより、国際社会あるいは世界社会における新たな現象あるいは活動をより明確に説明することが可能になるのかどうかを検討することである」と述べている。

第二の目的は「国際共生という用語、特に共生という用語は日本語では広く使用され、一般的に一定の理解が受容されているが、特に英語での表現が必ずしも十分浸透しているとは考えられない。特に、国際関係論など社会科学における英語の論文において、これに対応する用語が必ずしも一般的に広く受容されていると考えられないことは、すなわち英語圏での研究において国際共生に対応する用語が明確には存在しないということ、そのような概念も存在しないことを意味するのであろうか。これらの疑問に答えること」と規定されている。

2. 国際共生の英語は何か？

日本語と外国語で単語が一对一に対応しないことは今さら論を俟たない。本研究所の英名も Research Institute of International Collaboration and Co-existence で、日本語に逆に直訳すれば協働共存で、共存は例えばウェストファリア条約におけるプロテスタント諸侯とカトリック諸侯の共存、冷戦における自由主義陣営と共産主義陣営の共存、韓国と北朝鮮の共存、インドとパキスタンの共存、日本国内の憲法9条2項と自衛隊の共存など、互いに相容れない不倶戴天の敵同士が雌雄を決する決闘を避け現実的妥協を図って共存するといった文脈で用いられることの多い言葉である。共存協働といえは呉越同舟を連想させる。核戦争による相互確証破壊を避けるために米ソ二大陣営が協力するという呉越同舟が好例であり、環境破壊による宇宙船地球号上の現代文明の滅亡を避けるための国際協力はより困難であるが、実現すれば文字通り呉越同舟の好例となろう。見方を変えれば、共存は家父長支配 (patriarchy) を範とする秩序 (雌雄を決する決闘を必要とする) に対しジェンダー論的転回を志向するともいえよう。しかし例えば核廃絶を唱えると、相互確証破壊という、呉越が水上に同舟して争いを避けて共存すべき理由を奪う。そこで単なる共存を越えた概念が望まれる。それが共生だ。

第7号論説の提唱する *conviviality* という言葉に込められたと思われる大意を汲んで逆に日本語化すれば共存共栄で、英語でも *co-prosperity* といえは通じる。しかし共栄は大東亜共栄圏を連想させて障りがあるので共生という。もちろん冷戦のような死の恐怖を媒体とした死の共存ではなく生の共存という意味で共生というのであろうから、例えばアリストテレスの形而上学のデュナミス (種) → エネルゲイア (成長) → エンテレキア (開花) を念頭において *co-flourishing* と書いた方が良いかも知れない。本稿は、多言語主義 (multilingualism) がこの *co-flourishing* ないし *human flourishing* に至る一つの具体的な手法であることを示唆する (→巻頭言、研究者紹介)。Human flourishing は人類種の開花という意味での共生で、アリストテレスの論ずる人類が生きて目的ないし目的完成態エンテレキアすなわち幸福エウダイモニアの英訳の一つである。実際、アリストテレスは「政治は多元性だ」と論じるにあたり、音楽の例えで君が代のような国歌の斉唱 (ユ

ニゾン=単声)ではなくヨーロッパ連合歌のような合唱 (ポリフォニー=多声) を目指すように言っている。

3. 英国学派の国際関係論との近似性

共存 (*co-existence*) はバリー・ブザンの国際関係論の英国学派 (→書評) の用語でいえば、多元性 (*plurality*) の系としての保守的な概念であり、協同 (*co-operative*) や収束または収斂 (*convergence*) とは必ずしも矛盾しないものの区別される。共存の好例はウェストファリア体制や冷戦体制であり、主権、領土、秩序、国民意識、内政不干渉、外交、平和、国際社会 (国家間社会) といった概念とつながりが深く、理想主義つまり理想や正義や文明標準の追求に伴う戦争や革命や同化、つまり様々な宗教戦争や世界革命や民族浄化・ジェノサイドなどの対極にある現実主義 (*realism*) に通じる。

これに対して日本語で共生という場合には、単なる共存だけではなく、英国学派 (ブザン) のいう連帯主義 (*solidarism*) にも通じることを明確にする用語だと言って良いだろう。連帯主義は、自由、平等、博愛、人権、民主主義、正義あるいは世界社会 (人類社会) といった概念とつながりが深い。ここで、アメリカの国際政治学なら現実主義と理想主義の対立で捉えられるものを、英国学派 (ブザン) は後者を連帯主義といって前者と陰陽の関係にあるものとして捉えている。その点も含めて、日本語の国際共生という概念は、アメリカの国際システム論に對置される英国学派の特徴といえる国際社会論 (世界社会へのベクトルも否定しない) に近い側面を持つと思われる。

実は、井上達夫が日本語で『共生の作法』(創文社 1986 年) を世に問うたとき、その語源は英国の政治哲学者マイケル・オウクショット (Michael Oakeshott, *On Human Conduct*, Oxford University Press, 1975) がラテン語から作った *conviviality* であった。これは品行の規範を共有する「社交体」(*societas*) 例えばプラトンの饗宴 (*symposium* 「飲み会」) のような各参加者が品行の作法を共有しながら会話を楽しみ、それぞれの目的を自由に追求する共生のあり方を指す。*Conviviality* は酒の席、宴席を連想させるが、オウクショットの言わんとするところは酒の勢いで羽目を外すことの反対なのでお茶会で良いだろう。オウクショットを国際関係論の英国学派に含める論者は少ないのだが、例えば国同士の品行の規範を国際法に求めれば英国学派の国際社会観をよく表すことができそう。なお、井上達夫が「社交体」と訳した *societas* というラテン語はローマ法・民法の組合契約を指しその発展形態にオウクショットが「社交体」と對置する「統一体」の一例である株式会社があるという矛盾が生じるが、*societas* は社会 *society* の語源でもある。先に提示したアリストテレスの人類種の目的完成態を表す英語 *human flourishing* は人が集まって良く生きる目的を漠然と表し、組合契約ほど目的の特定化はしていない。従って、本稿は、その目的を特定の国 (ポリス) の目的のように固定的に捉える必要はないと考えており、人が集まって国を作り国が集まって国際社会を作り (世界社会への発展可能性は否定せず) 全体として人類種が良く生きる状態「共生」を、プラトンの『饗宴』式のお茶会を連想させる *conviviality* と呼ぶか、アリストテレスの『形而上学』・『倫理学』式に *human flourishing* と呼ぶかに本質の違いはないと考える。

ともかく、英国学派の基本概念「社会」ないし「社交体」は、アメリカの国際 (国家間) システム論のシステムが天体物理学の銀河系や太陽系や惑星系の系 (*system*)、重力力学の系の意味であることと好対照をなす。確かに国の力を軍事力や経済力などの力で計量することは重要であり、例えば 1941 年の日本の意思決定者にそういう力学の計算ができれば、対米英開戦決定などには至らなかったと思われるので実践的にも有益であろう。しかし、政治には本来的に人間の意思、とくに国という重層的組織体における人間の意思という厄介な不確定要素が常に介在するため、天体力学と同じように厳密に計算することは不可能なのである。従って英国学派は今後も国際関係論において重要性を増していくと思われる。

日本語による国際関係論において国際共生という概念は、そもそも英語と一对一に対応する概念ではない。しかし、共生が社会・社交体につながる緩やかな意味での構成的な概念であること、共存という保守的な現実主義的ベクトルだけではなく連帯主義的ベクトルをも合わせ持たせるために共生といっていることから、国際共生は英国学派の全体論的 (*holistic*) なアプローチに通じる側面を有し、その点において決してガラパゴス的な孤立概念ではなく、例えば上述のオウクショット用語やアリストテレス用語の援用により国際的汎用性 (*compatibility*) を持ちうると思われる。